戦死がなければ

旭区支部　福井　恵美子（子の妻）
戦没者　福井　辰次
戦没地　フィリピン

我が家では、義父（夫の父）とその弟二人の三人が出征し、義父と一番下の弟にあたる叔父が戦死しております。

義父は三十一歳で、妻と夫と三歳下の弟の三人を残してレイテ島にて玉砕しました。

叔父は、二十六歳の若さでまだ独身でした。敵の魚雷攻撃を受けてフィリピン沖にて一生を終えています。

未亡人となった三十二歳の姑（義母）と、夫と弟の二人の遺児、祖父、江戸時代生まれの曾祖父母、二十歳代になったばかりの二人の叔母という家族構成になりました。

江戸時代から続いた旧家で、土地も小作人に貸してある程なので、土地などを売って生活し、跡取りで、大黒柱でもある義父がいなくても金銭的な苦労はなかったそうです。

大家族の上に親戚や昔からのつきあいがあり、今とは比較にならないほどの交わりがあったので義父や叔父が死んでもそれほど淋しくなかったようです。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

男手が足りない部分は、青森から夫婦で出稼ぎに来た人に畑を手伝ってもらい、この夫婦とは、その後も交流が続きリンゴが送られてきていました。

終戦となり、義父と、一番下の弟の戦死の公報が届いたそうですが、すぐ下の弟はシベリヤに抑留されていることが判ったそうです。やがて、叔父は無事シベリヤから祖国へ帰還することが出来ました。

帰国した叔父は、姑（義母）と再婚することになり、夫にとっては叔父さんが、お父さんとなり、新しい家族の生活が始まり、やがて、弟が生まれ、兄弟は三人となりました。

その姑も平成十五年元日の夜、八十八歳で他界しました。義父は奇しくも、姑の後を追う様にその一週間後に亡くなりました。

戦争によって、今まで築かれた互いの人生が変わってゆく、現代の世相から考えると想像がつかないことでしょうが、当時は、それぞれの家の事情もあり、この様なことは珍しいことではなく、他にも生活のため子供のために、いろんな結婚があったと聞きます。

これからの世代には、戦争のもたらす犠牲により、幸せな家庭や夫婦が引き裂かれたりすることがない様、この平和のバトンを、次の世代へと引き継いでゆくことが、私達の使命であると強く思うものです。

©2011_財団法人神奈川県遺族会